

東日本大震災に徳島日赤 DMAT・救護班を派遣しました

2011年3月11日(金)14時46分頃に、東北地方太平洋沖でマグニチュード9.0の地震が発生いたしました。被災にあわれた方々には、心からお見舞い申し上げます。

この地震による災害救護活動のために、当院から12日午前7時に徳島日赤 DMAT（災害派遣医療チーム）として1チーム、続いて12時30分に日本赤十字社徳島県支部救護班として1個班が出発しました。

当院では今後も引き続き救護班を送り出す予定です。



病院を出発する徳島日赤 DMAT

徳島日赤 DMAT 活動報告

3月12日15時40分、自衛隊航空機にて伊丹空港を出発。17時30分、花巻空港に到着しました。

花巻空港内に設置された SCU (staging care unit、これは被災地からの傷病者を運び出すための拠点) にて活動を行うこととなり、先発の DMAT 含め全国から 69 隊、約 300 名の DMAT が同所に参集しました。同日の傷病者搬送を手伝い、翌日のミーティングを行った後、22 時に解散。バス移動にて盛岡赤十字病院へ 23 時に到着。患者待合のスペースを解放していただき仮眠をとりました。

翌 13 日午前 6 時盛岡赤十字病院発。7 時より SCU の開設準備、ミーティング。福田は統轄 DMAT として花巻空港 SCU の治療責任者を担当させていただきました。他の隊員も精力的に活動を行い、無事 21 時に最後の広域搬送の自衛隊機を送り出しました。

(徳島日赤統轄 DMAT 隊員 福田靖医師)



日赤徳島県支部 当院スタッフ主力の救護班第1班が帰任 ～岩手県宮古市で3日間活動

東日本大震災の発生翌日の12日にいち早く出動し、救護活動に3日間従事した日赤徳島県支部の救護班第1班（岩崎英隆救護班長・他9人）が任務を終え17日夜、当院に帰任した。日浅芳一副院长ら職員約50人が慰労の拍手で出迎えるなか、到着した救護班員はしっかりした足取り。岩崎班長が現地の厳しい現状を報告した。

当院の医師、看護師、薬剤師、事務部主事を主体に編成された第1班は、12日昼に徳島を出発、北陸自動車道経由の陸路で岩手県に向かった。盛岡赤十字病院には26時間後の13日午後2時に到着。さらに太平洋岸の宮古市へ移動した。

救護活動は宮古市山田町の山田高校で、14日から16日まで3日間行った。1265名の避難者がおり、初日は54名を診察し、うち3名を後方搬送（クラッシュ症候群等）した。2日目は62名を診察、3日目にも45名を診察し1名を後方搬送した。

第1班は17日午前1時に日赤徳島県支部の救護第2班（ひのみね総合療育センター医療班）との引き継ぎを終え帰途に就いた。

救護班長の岩崎医師は「避難所の人たちは、着の身着のままで命からがら逃げてきていました。水、電気、ガスといったライフラインはまだ復旧していません。私たちも通信手段がない状態でした。被害の大きさをまざまざと痛感させられました。まだまだ救助、救護が必要です。先に派遣された班員の経験を伝えながら、より役立つ救援を続けたい」と報告した。



東日本大震災 救護班が相次いで出発

東日本大震災の被災地へ、日赤徳島県支部の救護班が継続して派遣されている。19日に第3班（村上尚嗣救護班長、他7人）22日に第4班（山本英司救護班長、他6人）が出発した。

両救護班は徳島赤十字病院の医師、看護師、薬剤師、主事らを主体とするチーム。当院で行われた出発式で、救護班長の村上、山本各医師は「院内とは違う環境のなかで、メンタル面のサポートなどできる限りがんばってきたい」と決意を述べた。日浅芳一副院長ら多くの職員が拍手で見送った。

救護班は空路と陸路を経て、岩手県宮古市山田町の山田高校に設置した救護所や巡回診療による医療救護活動を展開する。



3月19日 第3班出発式



3月22日 第4班出発式



救護班第3班 活動報告 (5階北病棟 倉元由佳利)

救護班第3班として3月19日～23日に岩手県山田町の山田高等学校に救護に行きました。山田高等学校には多くの方々が避難されていました。

山田高等学校の教室を救護所として活動していました。体育館に避難している方々の中で、体調不良や薬がないという方々が来られます。体育館にも1日1回巡回に行っていました。その他、山田高校の隣に住んでいるお宅の高齢者で褥瘡ができている方の訪問もしました。



受付です。ベニア板でしきって受付エリア、診察エリア、処置エリア、薬局エリアで区切っています。



救護所は第1班が立ち上げており、引き続き使わせてもらっていました。



感染予防のためにマスクをつけて頂いています。



受付でこれに名前や主訴など記入
→医師も処方や点滴、指示などを記入。(カルテ代わり)



診察エリア 2人の医師がそれぞれ診察していました。



東日本大震災 当院医師・看護師ら切れ目ない救護活動

東日本大震災発生から 20 日余りが経過した。医師や、看護師、薬剤師、主事など当院職員を含む日赤徳島県支部の救護班による救護活動が、発災直後の第 1 班派遣以降、一日の切れ目もなく精力的に続けられている。

第 4 班（班長・山本英司医師を含む当院の 7 人が参加）は 3 月 23、24、25 の 3 日間、岩手県山田町の山田高校に設置した救護所で医療活動を行い 26 日に帰還。次いで、第 5 班（班長・當別當洋平医師を含む当院の 3 人が参加）29、30、31 の 3 日間活動し、4 月 1 日に帰還した。

第 4 班の山本班長は「現地の方々に安心感を提供するという面で少しは力になれたと思います。ただ、医療的な支援が引き続き必要な状態なので、何らかの形で協力できればと思います。」と語った。

また、第 5 班の當別當班長は「電気、水など環境は良くなってきつつある。避難者の方の病状も安定してきている。今後は医療スタッフの不足を補うため、災害拠点病院への支援なども必要かと思う。」と現地の状況を報告した。

この後、第 6 班（班長・松本大資医師を含む当院の 6 人が参加）が 4 月 3 日に出発する予定。



3 月 26 日 帰還した第 4 班



3 月 28 日 第 5 班出発式

東日本大震災 救護第6班が帰還

東日本大震災で宮城県石巻市に派遣されていた日赤徳島県支部の救護第6班が4月7日夕に帰還した。全部で12人の班員のうち、当院からは松本大資班長ら医師、看護師、薬剤師、主事ら7人が参加。4月4日から6日まで医療救護活動を行った。

多くの職員に拍手で迎えられた班員を代表し、松本救護班長が「現地は思っていた以上に被害が大きく、医療態勢も混乱していたが、素晴らしい班員とともに少しは力になれたと思います。貴重な経験をさせていただきました」とあいさつ。日浅芳一院長は「本当にご苦労様でした」と労をねぎらった。



4月3日 出発



4月7日 当院職員が拍手で迎える

東日本大震災 救護班第7班が帰還

東日本大震災で被災地に派遣されていた、日赤徳島県支部救護第7班（松岡裕班長、8人）が4月14日夕、徳島赤十字病院に帰還した。第7班は宮城県の牡鹿半島で11、12、13の3日間避難所などを巡回診療して、被災者の医療救護活動に従事してきた。

班長の松岡医師は「余震の続くなか久米宏実師長をはじめスタッフ全員の協力で、支障なく活動できた。被災者の方々は、怖くて夜も眠れない方が多かった。今回の経験を啓蒙しつつ、南海大地震にも備えたい」とあいさつ。日浅芳一院長らが出迎え「交通事情も悪いなか本当にご苦労さまでした」と労をねぎらった。



東日本大震災 救護班第 8 班が宮城県石巻市へ出発

4月17日（日）午前7時、日赤徳島県支部救護班第8班（木下光博班長、8人）の出発式に、日浅院長をはじめとする職員ら約40人が見送りに集まった。第8班を代表して、班長の木下医師は「被災地に少しでも長くとどまり、ひとりでも多くの人を救護していきたい」とあいさつ。日浅院長は「みなさん自身の健康も大切です。無事に帰ってきて下さい」と言葉を贈った。第8班は石巻赤十字病院に到着後、現地災害対策本部の指示により石巻地区を巡回診療する。



東日本大震災 救護班第9班が宮城県石巻市へ出発

4月26日（火）午前7時、日赤徳島県支部救護班第9班（島田直班長、8人）の出発式が行なわれた。第9班を代表して、班長の島田医師が「頑張って参ります。応援よろしくお願ひします」とあいさつ。日浅院長をはじめとする職員ら多数が拍手で見送った。第9班は石巻地区を巡回診療し、石巻赤十字病院でも活動予定。



東日本大震災で派遣 救護班第9班が帰還

東日本大震災の医療救護活動に派遣されていた日赤徳島県支部の救護班第9班（島田直班長・8人）が4月30日夕に当院に帰還した。第9班は宮城県石巻市の避難所と石巻赤十字病院のショートステイベースでの巡回診療を行ってきた。

島田班長は「休日にもかかわらず大勢のお出迎え、ありがとうございます。現地では支援チームの受け入れ態勢もよく救護活動がうまく稼働していました。しかし、今も多くのがれきに囲まれ、健康管理には苦労も多いと思われる」と報告した。

日浅芳一院長は「現地への支援は今後とも続けたいと考えています。厳しい環境のなか本当にご苦労さまでした」とねぎらいの言葉を述べた。



救護班第9班 活動報告 (5階北病棟 楠本真央)

派遣先	宮城県石巻市
総人口	約16万人(2011年2月現在) 県内第2の人口を擁する。
名産	たらこ(生産日本一) 水産都市であるほか、稲作を中心とした農業が盛ん。
本震	震度6弱
死亡者数:2,933名/行方不明者数:2,770名/避難所数:108カ所	

第9班が携わった活動は以下の3つでした。

- ショートステイベース支援
- ER支援
- 避難所巡回診療

活動内容 1.ショートステイベース

- 身体・精神面で避難所生活が困難な方が入所。避難所・自宅までの一時受入。
- 東京で麻疹が流行。石巻では当所が麻疹受け入れ所に指定されました(入所なし)。



石巻ロイヤル病院(入院・外来施設)の閉鎖病棟を借りて運営。全24床。6名入所。入所手配は日赤医師や地域連携課が行います。



ビニル紐と防水シートで作られたカーテン。ナースコール代わりに点滴台(叩いて呼ぶ)皆さんなら何を代用しますか?



水は出ないのでボトルで代用



流せません

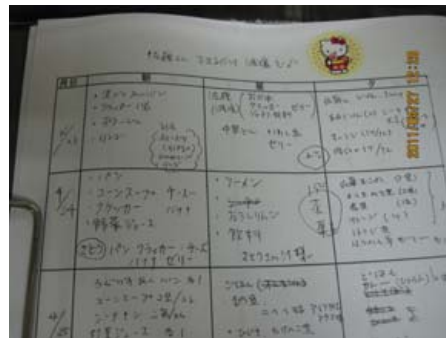


排泄物が固まるポータブルトイレ

階下の入院病棟では水を使うことができました。5北を代表してシャワー浴介助を行っていた。最中に、震度4の余震がありました。入所者Nさんと一緒にしゃがんで揺れを凌ぎました。



石巻市や救護班より支給された缶詰及び保存食。3食+15時のおやつをつくります。主食は、アルファ米またはパックご飯を湯煎。



避難所生活での低栄養が問題視されている。一方、ここでは塩分制限が課題でした。どの缶詰も辛い…。味噌汁は2倍に希釈。

日中に赤十字病院から紹介された患者様が、夜間に下血。ライン確保・止血剤投与の上、救急車で転送する運びとなりました。酸素配管もなく輸血もできない。ここでは最善の治療ができないためとの説明がされましたが、患者さんからは「ここに置いてほしいのに。こんなのは、たらい回し。」との言葉が聞かれ、申し訳ない気持ちになりました。

活動内容 2.ER 支援

石巻赤十字病院 ER 黄色エリア（急遽健診センターを代用）

- 蕁麻疹
- COPD 増悪
- 消化管出血
- 瓦礫撤去作業中の負傷（手指裂創、熱傷）ほか
- 小児は蕁麻疹、胃腸炎、中耳炎など

インフルエンザは簡易検査キットで判定。この日は熱発者2名、両者陰性でした。正しく内服できない環境や、長い避難所生活でのストレスが要因と思われる症例がほとんど。瓦礫撤去で受傷された方のひとは県外ボランティアの方でした。

普段のERのように家人・連絡先について尋ねますが、「だめだった（助からなかった）んです。」「流れちゃってね。」という返事も聞かれました。“大変でしたね”と言う他に掛ける言葉が見つからず、胸の痛む思いをする場面もありました。

活動内容 3.巡回診療

牡鹿半島 蜂耕寺（避難所）、往診2軒

日赤医療センター・広島・徳島の3班で診療。

満潮時刻を4時間以上避けても浸水している道がありました。



本部は地図でいっぱい



掲示物は随時更新

「この辺は牡蠣をたくさん作っていたのにね、全部流されてしまったの。」

生活拠点というよりは集会所的な避難所。約20人の住民の方（全員高齢者）が独歩で訪れました。診療中に震度4の余震。大きな音・揺れであるにも関わらず、被災者の方は誰一人顔色を変えませんでした。すっかり慣れてしまっている様子に、こちらは危機感を覚えました。下肢の痛みなどで避難所へ来られない方のお宅へは往診で訪れました。

- 不眠の訴えがもっとも多く、次いで高血圧が多かった印象。
- 診察・処方をするほか、避難所における要介護者を把握する目的で“避難所要介護者質問表”の運営が始まっていました。
- ワーファリンを内服されている方用に簡易 PT-INR 測定器を持参しました（使用せず）。管理上、プラザキサ（INR 定期測定や食事指導が不要）への移行が望ましいとのことでした。



1階部分が流された家屋。山積みの瓦礫



横転したままの船が道を阻む

石巻市内の様子



発災時刻で止まった時計



雇用機会を増やそうとする求人ポスターもありました



復旧・復興に向けて集まる



”無事です”



倒壊店舗



倒壊した時計店



橋が落ちて寸断された道路



ここから先へは進めませんでした



駅だったのか…



瓦礫、浸水（地盤沈下）



瓦礫でいっぱいGS



別の角度から見ると家が軒流れている



街中に大きな船



不適切な表現ですが、焼け野原と錯覚するほどでした



流れ着いた車両もそのまま



鯨大和煮（石巻水産）の巨大缶も倒れたまま



石巻市、牡鹿半島・地図

東日本大震災 救護班第 10 班とこころのケア第 1 班が宮城県石巻市へ出発

5月21日（土）午前7時、日赤徳島県支部救護班第10班（中川貴文班長、8人）とこころのケア第1班（池淵弘子看護師長、3人）の出発式が行なわれた。両班を代表して、第10班班長の中川医師があいさつした。日浅芳一院長は「被災地には救護の手を待っている方々がまだまだいらっしゃいます。体と心の両面から支える医療救護活動をお願いします」と激励した。第10班は石巻市渡波(わたのは)地区を巡回診療した後、石巻赤十字病院でER支援の予定。こころのケア班は石巻地区巡回診療などを予定している。



東日本大震災における当院の取り組み



処置台



点滴をする時などここで寝てもらいました。点滴スタンドがないので、ベニア板にあいている穴にフックをひっかけてそこに点滴をつるしていました。



薬局エリア
薬剤師の方がここで薬を渡し服薬指導していました。



黒板に別室にいる患者さんの名前・状態・処置などを書いています。(発熱室と嘔吐室を別室に設けていました)



別室の嘔吐室
点滴スタンドの代わりに身長計を使っていません。嘔吐下痢の方が多かったです。

私たちが行った時期は、電気は通っていましたが、水道が通っていませんでした。(ちなみに携帯電話は、D社はつながりましたが、A社とS社はつながりませんでした。)



キレイな水は洗面などに使っています。



手洗いはなかなか水を使ってできないので、アルコール消毒がいたる所に設置されていました。

東日本大震災における当院の取り組み



トイレも水が流れないので、終わったらバケツで水を汲んで勢よく水を流していました。



ティッシュは流れていかず、つまってしまうので、ダンボールで作ったゴミ箱の中に入れてあります。このゴミ箱は保健師の方やボランティアの方が作っています。



自衛隊による水の配給



自衛隊が設置した簡易トイレ
(ここは水が流れます)



自衛隊による物品の支給
私服の方々は避難されている方で、手伝ってられます。



支援物品は教室に



「今から衣服の支給を行います」と放送が流れると、この教室の前に行列ができていました。



教室の中の様子

写真はありませんが、自衛隊によるお風呂の支援もありました。1日15人くらいが入ることができ、希望者がいられているようでした。

東日本大震災における当院の取り組み



私たちが寝泊りしたところは「化学準備室」



寝床は寝袋と毛布 寝袋は意外に温かいです。



中の様子

1日2・3回は余震がおきていました。夜中に、震度3の地震がおきて飛び起きましたが、誰ひとり起きておらず、私もそのまま静かに寝ました。



朝ごはん中 食べ物はカップラーメン、パン、アルファ米（お湯をいれて20分待ったらご飯ができるという非常食）、栄養調整食品、お菓子などでした。



最終日に食べたうどんが最高においしかったです。

被災地 海側は津波によるもの、少し内陸に行くとも火事による被害がほとんどでした。



東日本大震災における当院の取り組み



堤防も壊れていました



火事による被害



「山田がんばろう！」

東日本大震災における当院の取り組み



見えにくいですが雪が降ってます。



海外メディアの取材を受ける平井師長



最終日 4 班に引継ぎが終わりほっと笑顔。
夜中 2 時ごろ一バスで秋田空港へ

東日本大震災 救護班第 11 班が帰還

2011 年 6 月 7 日（火）、東日本大震災の被災地へ出発した日赤徳島県支部救護班第 11 班（木原歩美班長、7 人）は石巻市渡波（わたのは）地区救護所での診療活動と、地区の巡回診療などを行なった後、6 月 12 日（日）夕刻、当院に帰還した。

第 11 班を代表して木原班長（外科レジデント医師）は「私たちが救護にあたった地域のように医療機関復旧が乏しい地区では、救護所の存在が被災者の安心につながっており少人数でも救護所や巡回診療のニーズはあるため救援の撤退にはまだ時間がかかると感じました。」と報告した。

後藤哲也副院長は「お疲れ様でした。」と救護班メンバーの労をねぎらった。

